

天經或問と江戸時代中期の天文學

京大講師 渡邊敏夫

“天經或問”は、支那の明末清初の游子六の著はしたものである。閩中の游子六は、その學を、西域の人熊有網 (Sabathin de Ursis) から受けし事は、天經或問序桐城の人方以智密之の撰中に明である。“天經”とは、この書に論ずる處確實にして、天と不違、千載不易の義とすべきを以て、かく名づける。又“或問”とは、或人の問を設けて、之に答へるといふ形式をとつて記述して居るからである。勿論、自問自答である。天經或問の記述する處は、支那古代よりの中華の天學家の説、及び西洋天文學の知識に基いた、當時に於る天文學一般及び地理、氣象、之等に關連せる事象等である。

天經或問が我が國に移入されたのは何時頃であつたらうか？ 三浦梅園の“歸山録”の中から、少し長いが、参考のため、關係あるところを轉載すると：

國家耶蘇ノ亂ニ懲リテ、舌人トイヘドモ猶西洋ノ書ヲ讀ムコトヲ許サズ。況ンヤ其ノ佗ヲヤ。故ニ西洋ノ學ノ書一切ニ之ヲ禁ズ。其ノ禁目

天主 耶蘇 西洋 歐邏巴 利瑪竇 利太西 利山人 陽瑪若 湯若望 游藝游子六
景教 彝學夷 西學

書ニ三十四種ノ禁書アリ。

天學書函 天文略 天主實記 天主續編 計開 畸人 十慰 西學配 交友論
辨學遺腹 七克 幾何原本 彌撒祭義 泰西水法 代疑篇 表度說 三山論學說
三山學記 教要解略 唐景教碑附 聖記百言 二十五言 職方外記 靈言龜句
同文算指 況義 圓容較義 渾蓋通憲圖說 勾股義 測量法義 萬物直原
簡平義記 滌平儀記 滌罪正記

其外、語禁目ニワタル書ハ悉ク焚塗ス。是ヲ查スル役ハ、聖堂預リノ向井氏、春徳寺ノ和尚、兩人ナリ。右ノ外、焚塗ニ及ブ者

天經或問後集 游子六著

貞享四年丁卯、(1687年) 廿二番船、塗抹。

コレ禁目ノ外、西學ニ觸ルルコトアルナリ。其ノ内只贈ニ西士一過ニ西士暮ノ詩一首ヲ出スモ、其ノ集コレガ爲ニ廢スレバ、國禁ノ嚴ナルコト知ルベシ。智聖堂ニ詣シ、向井氏ニ遇ツテコノ事ヲ問フニ、此ノ禁モ亦古今アリ。國初耶蘇一亂ノ後、深ク懲リ給ヒテ、一言天主ニ及ブモ思ミ給ヘリ。サレドモ西洋ノ學ハ天文地理ニ深ク通ズレバ、其ノ書國禁ナル時ハ、天文曆術ノ學缺ク事タルニ因ツテ、享保二年(1717年)官命アリテ其禁ニアル、曰ク嚙ト名目トハ免ズ、唯其ノ教ヲ説クノ書ノミ之ヲ禁ズト云フ。コレニヨツテ西學稍々世ニ出テ、禁書ノ内、天文略、交友論、幾何原本、泰西水法、職方外記、同文算指、圓容較義、渾蓋通憲圖說、測量法義等皆世ニ行ハル。已來曆算全書等官禁ニアラズ。西人ノ名目ヲ出セル詩集世ニ行フコトヲ得ザル時ト大イニ

異ナリ。國家ノ學者ニ賜スル事大ナリ。コレヨリ世ノ學者稍々西書ヲ讀ム事ヲ知ツテ、開臟ノ翻書等類ヲトシテ出ヅ。

以上に依つて寛永の禁書の内容を詳しく知ることが出来、且つ享保の禁書令の緩和後、天文地理書等が多く舶來されるやうになつた経緯をも知る事が出来る。この中に游子六、天經或問の名も含まれて居るのであるが、享保以前に已に天經或問が我が國に移入されて、或る人々には讀まれて居た事は次の事實からでも明である。即ち保井春海の“貞享曆”卷一に

「……天經或問亦全爲丙之方者也……」

とあり、又、“天文瓊統”、“壬癸錄”、“新盧面令”等の中にも天經或問が度々引用されて居る。新井白石が正徳年中に書いた彼の著“西洋紀聞”にも天經或問を引用して居る。白石や春海は、役人の事として、宮府に藏せられたる書を見る事が出来たのかも知れないが、然し、正徳二年版行の寺島良安の著書、日本で最初の百科辭典と云つてもよい“和漢三才圖會”の天部に、天經或問の記事が引用されて居る事を見れば、強ち役人ばかりが見たのではなからう。

西川如見の著述を見れば分るやうに、已に如見も早くから天經或問から彼の天文學を學んだ事が知られるし、或は、又、我が國最初の天文學に關する刊本として知られて居る井口常範の“天文圖解”五卷の中にも、利瑪竇等が始めて支那へ輸入した月天、日天、九重天、宗動天等の記載がある處より察しても、寛永以後禁書となつたものが用ひられて居た事が推察される。なほ、元祿十五年(1702年)に歿した儒者中村湯齋の著作“天文叢要”(五卷)を引用しておこう。その第一卷に下の文がある：

長崎治所、毎歲檢察商船所載來圖書、若有涉妖法者、則逐港不入、往歲洛儒醫南部草壽在崎港給其役、天經始來、以其繫天書許留、遂行四方、草壽還洛、示其書於余、余得而看之、率鑿々窺測架造之論、而不達理氣之自然趣、然其涉歷之廣、測驗之精、有從未所未見、所來者、則雖未嘗驗之、姑采收于此編、備他日之恭覽。

以上述べた事から、享保の禁書令解禁前に、已に一部天文書等は移入されて居た事が推察出来るのである。

さて支那より舶來せる天經或問には二種類あつたやうである。前記天經或問後集とある處から推せば、前後二集あるわけである。今、入江脩の“天經或問註解”凡例によると

天經或問舊本有二一刊予往歲所見者其序六篇與倭刊本同而古今天學家名數殆倍之且圖卷初題天經或問首卷六字圖象字體亦有往々不同者近來借覽郡上侯藏本予此刻憑以考訂焉然彼本闕張昌亮首序且無圖初題六字而古今天學家名數全同倭本因茲觀之則倭本之於舊本大同小異而出入二刊其適從

孰本與予未審所據。

更に、入江脩の“天經或問圖卷辯解”に云ふ：

予嘗テ崎陽ニ客遊シテ 鑿書官 數人ニ聞ケリ、往歲華舶天經或問後編三冊ヲ貢獻シテ官庫ニ收ル、其書即遊子六ノ述作ニシテ、委ク前編ノ紕謬ヲ改正ス、爾來復渡リ來ラス。故ニ世間無之ト、予固ヨリ其書ヲ不見。然ルニ今予カ雌黃スル所ト殆同キ者アランカ、他日若又渡リ來リ、予ヤ幸ニ天ノ寵靈ニ憑テ、其書ヲ見ルコトヲ得ハ、素願實ニ足ン。後學亦幸ニ其書ヲ見ルコトヲ得テ、予苟モ是ヲ非トスルノ過ヲ訂サハ、是又幸ナラン。

之等の記事によつて、二種類あつた事は分るが、西川正休の訓點を施した天經或問と、この記述とも少し違ふのであつて、この點は未だ私の疑問とする處である。

我が國に於て西洋天文学の入つた最初の地は長崎であり、已に寛永七年から享保五年(1720年)迄の九十年間、鎖國の最も嚴なりし時代に、林吉右衛門、その弟子の小林謙貞義信等が西洋天文学を講述した事はよく知られた事柄である。西川如見がかゝる地に生れ、天學を學んだのであるが、彼の天文説は天經或問に基いて居ると考へられる點が多い。恐らくその影響を最も多く受けた最初の人か如見ではなからうか？ 彼の著“天文義論”、“兩儀集説”等はそれを窺ふに十分である。“天經或問訓點”三卷はその子正休の著はすものであり、又、正休は家業を繼いで門弟に天學を講じたが、初學者のために書いたものが“大略天學名目鈔”で、“天經或問訓點”三卷と共に享保十五年(1730年)に出版した。

天經或問と同時代に我が國に於て“管窺輯要”、“曆算全書”等の天文書も支那より舶來されて、世に行はれて居たのであるが、天經或問程に廣く讀まれ、引用されて、一般天文思想に影響を及ぼしたものは少かつた。と云ふのは、之等二著は、内容浩繁にすぎ、占候、推歩を主としたからである。之に反して、天經或問は占候を採らず、曆數に泥まず、一般天文学書として適當して居つたが爲であらう。天文を學ばんと志すものにして、之を讀まざるはなく、天學を講ずる者は之を授けざるは無き状態であつた事は當時の種々の記事から推察出来る處である。西川正休の“大略天學名目鈔”(内題“天學初學問答”)中にも

「……古ヨリ一部ノ書ニ、始終全ク天學ヲ説タルハナシ。適々有ト雖ドモ、全ク用ルニタラス。今多ク世間ニ流布スル所ノ天文地理ヲ著シタル書ハ、天經或問ノミニテ、此外ニ用ベキ書ナシ。曆書ハ有リト雖ドモ、總テ曆書ニハ、日月星運行ノ數術ノミヲ記シテ、天地ノ形體ト、天地ノ道理トヲ詳ニセズ。故ニ儒家醫家ノ如キハ、學テ用少シ。天經或問モ、弊多シト雖ドモ、古今ノ諸説ヲ集メテ、篇ヲ成シ、殊ニ天地ノ形體ト道理トヲ大概ニ説ケルガ故ニ、撰ミ用テ可也、……」

と記して天經或問を推薦して居るのである。安部泰邦の“天經或問正義”の中

にも

「……………是所以知其書之實學……………」

と記されて居る。又、上述の中村湯齋の“天文考要”中の一節からも、天經或問が持つ價値がどれ程のものかを知る事が出来よう。

かく、西川正休が訓點を施して世に頒行して以來、天經或問は我が國に於ける一般天文學書として世に廣まつて行つたのであるが、此の後、天經或問に關する研究書も、亦多く現はれるやうになつて來た。

松永良弼	天經或問發揮	(享保二十年)	(1735年)
土御門泰邦	天經或問正義	(元文二年)	(1737年)
入江 脩	天經或問註解序卷	}	(寛延三年)
〃	天經或問註解圖卷		
西村遠里	天經或問註解	(明和八年)	(1771年)
〃	天經 補符	天學指要	(安永五年)
原 長常	天文經緯國字解	(明和七年)	(1770年)
西川正休	天經或問訓點	(寛政六年再刻)	(1794年)
〃	天學命理辨		
澁川佑覽	校 正	天經或問	(嘉永五年)
			(1852年)

蘭學が興起して、直接翻譯によつて西洋天文學が輸入される迄は“天經或問”、“曆算全書”等を通じて、間接に西洋天文學が紹介され、少くとも徳川時代中期の天文學は、元祿以前の曆法天文學に過ぎなかつたものが、元祿享保以後、所謂命理の天文學に迄普及した事は、一に天經或問による處、非常に大なる事は明である。又、かくした西川父子の功をも見遁してはならないであらう。上記多くの著述の外、享保以後、蘭學勃興時代の寛政頃迄に版行された多くの著述は、何れもその實質に於ては天經或問が直接間接に影響して居るのである。とに角、徳川時代の初期、少くとも元祿頃迄の天文學が主として推歩の天學、即ち曆學に限られて居たものが、元祿以後、徳川中期に於る天文學が宇宙論に迄發展した事は、格物究理の學風盛んになつた事にもよるが、又、一つには將軍吉宗が天文學を好み、自ら觀測を試みたといふ程の熱意にもよるのである。かゝる時代に天經或問が存在したといふ事は、此の著述が多くの人によまれるやうになつた一因であつて、我が國の天文學の發展に寄與するところ大なりと云ふべきで、日本天文學史研究者の一度は眼を通すべき書物であらう。

天經或問及び此の時代の天文書は、西洋天文説を輸入したとは云へ、未だ天動説であつて、トレミー系の宇宙であつた。西洋では已に地動説が説へられて居つた時代ではあるが、何分、天文學が支那や日本に移入されたのは宣教師を通じての事であつたから、地動説は未だ行はれては居らない。天經或問がもた

らした大きな影響は、それ迄の宇宙観に新しい宇宙観を注入した事である。その一つの大きな現はれが、儒家の宇宙観自然観に對してである。始めにも引用した中村湯齋の“天文考要”中の一節でも、此の事は明である。“架空の論多くして理氣の説に達して居らない”と述べて居る如き、當時の儒者の思想を代表してゐると云つてよい。他の大きな反響は釋氏の宇宙世界観に對してであつた。之に關しては此處に唯だ義了道人の“釋教天文和談鈔”(文化三年)の凡例を引用して、この稿を終ることとする。

「……然ルニ明季ニ及テ西洋ノ邪教震且ニ傳來シテヨリ已來、彼徒專ラ天文ヲ以テ釋氏ヲ排斥セリ。我ガ神州モ亦同ジ。游藝ガ天經或問渡來シテヨリ以降、天文ヲ以テ佛敎ヲ輕侮スル者少カラズ。所謂江源ノ慶安等是也、……」

〔附記〕 入江の著はず“天經或問註解序圖”三卷は天經或問の序圖の註解であつて、本經の註解は序圖註解の卷尾に“本經註解六卷追刻”とあるが、實は版行されなかつたやうである。西村遠里著“天經或問註解”凡例によれば

此書本經二卷之註解也、以脩保叔序圖註解卷尾誌本經六卷追刻故愚侯之十有餘年而覓諸書肆亦數年然其書尙未行于世也、愚竊疑脩保叔秘藏之而不與諸梓匠歟又或有名無實歟愚也以懇望之切而作本經二卷註解九卷及附錄三卷都十二卷焉

とある事よりも、入江の本經註解の刊行は無かりし事確である。

次に、西村遠里著“天經或問註解”は世上15卷と傳へられて居るが、實は上記の通り總て12卷であり、その中、後の3卷は入江氏“序圖解”3卷を加へたもので、“天經或問序圖”の彼自身による註解はない。即ち、凡例によれば

此書序圖之解筑南久留米學官入江脩保叔著寬延庚午歲其書已成故讓之而愚解省焉……

之に附錄3卷即ち

“万圀圖釋”一卷、“采覽異”一卷、“古今天學家傳”一卷を加へて、15卷である。(終)

質 疑 應 答

問ひ：望遠鏡で照し合はせて見るに足る様な星圖(ノルトンの如き)は、どんなものがありますか？(Yz生)

答へ：望遠鏡の視野と見比べるやうな星の圖と言へば、ストックルの星圖(7等星まで)とか、バイエル・グラフの星圖(9等星まで)とか、ボン星表の圖(9等半まで)とか、フランクリン・アダムスの寫眞星圖(15等星まで)とか以外にはありません。ストックルの圖は50圓ぐらゐ、フランクリン・アダムス圖は300圓ぐらゐです。ノルトンの星圖は6等星までですから、望遠鏡的ではありません。(Y)